「知事との元気まるごとトーク」（令和3年10月19日開催）

「知事との元気まるごとトーク」は、知事と地域で元気に活動している団体等の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。

令和3年度2回目の「知事との元気まるごとトーク」を令和3年10月19日（火）に「下北文化会館」（むつ市）で開催しました。

当日は、下北地域県民局管内の5名の方にお集まりいただき、「移住で地域とつながる・ひろがる～私たちが描く下北の未来～」をテーマに意見交換を行いました。

当日の概要をお知らせします。

当日の出席者

一般社団法人しもきたＴＡＢＩあしすと	主事	大下 彩也香さん
佐井村	漁業支援員	家洞 昌太さん
むつ市海と森ふれあい体験館	館長	高屋 龍一さん
ＣＯＤＷＯＲＸ	代表	佐藤 恭太さん
一般社団法人ｔｓｕｍｕｇｕ	代表理事	小寺 将太さん

（知事）

未来デザイン県民会議ということで、もう随分長くやっています。それぞれの地域の現場には、いろんなジャンルの仕事や活動をしている方々がいて、地域がこうなってほしいとか、あるいは自分の活動をもっとたくさんの人に知らせたいとか、いろんな思いを持っていると思います。そんな思いをこの会議で聞かさせていただいて、県でアイデアを予算化し具体化してきました。

むつ下北の場合、先般、水害等があって非常に御迷惑をおかけしましたけれども、コロナ以前から、経済を回す上での課題であるとか、あるいは、若い人たちの仕事づくりとか、率直な意見をいただいてきました。今日も皆さんが思っていることを率直にお話いただければと思います。

県職員がずらっと並んでいますが、本県の状況を説明したり、繰り返しになりますが、出た意見を政策に生かし、また、下北のアイデアと西北のアイデアをくっ付けると、半島横断で新しいことが何かできるぞとか、いろいろなことを考えるために来てくれています。

是非、いい時間を一緒に過ごしていきたいと思っています。それでは楽しくいきましょう。よろしくお願いします。

（下北地域県民局長）

本日の意見交換テーマの設定理由等について、私から説明いたします。

当下北地域は、豊かな自然に育まれた水産物をはじめとする食の宝庫であり、独特の文化を有する魅力的な地域です。

これらの地域資源は、厳しい自然環境にも屈することなく、積極果敢に挑戦し続けてきた先人から今を生きる私たちに守り継がれてきたものであり、次世代へと着実に引き継いでいく必要があります。

しかしながら、当地域では、若年層の流出や少子高齢化により、将来の地域を支える後継者や担い手が不足するなどの問題が顕在化してきており、この状況は、今後も続いていくことが懸念されます。

一方で、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機として、生き方や働き方、価値観にも大きな変化が現れ、地域への還流の機運が高まってきており、本県への移住者や関係人口を増やしていくことにより、地域が抱える様々な課題を克服する、今は正にそのチャンスであるとも言えます。

本日、御出席いただいた皆様は、ＵターンやＩターンなどで下北地域に移住してこられ、第一次産業を支える若き担い手をはじめ、観光推進、人口減少対策、人材育成など、様々な地域活動においてそれぞれの個性や強みを生かして活躍の幅を広げられている方々であり、将来の下北地域を支える人財（人の財（たから））です。

そこで本日は、下北地域を活性化する道を探るべく、「移住で地域とつながる・ひろがる～私たちが描く下北の未来～」を意見交換のテーマとさせていただきました。

地域づくり活動を担う皆様の活躍によって、この下北地域をより一層活気のある、住んで良かったと思える地域にするため、皆様と活発な意見交換を行い、県民局事業をはじめ、県政全般に皆様の貴重な御意見を反映させながら、今後も一緒に地域づくりを進めていきたいと考えておりますので、本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

（大下彩也香氏）

はじめまして、しもきたＴＡＢＩあしすとの大下と申します。田子町の出身で３年前、転職をしてむつ市に来ました。高校まで田子で過ごし、地域づくりを仕事にしたいと思って青森公立大学の地域みらい学科に入りましたが、卒業後は八戸市の水産加工品の会社で働いていました。

地域づくりに関わる仕事に挑戦したいと思い、しもきたＴＡＢＩあしすとに転職し、移住しました。

仕事では、事務局長含めて５人だけの小さな職場なので、いろいろなことをやらせていただいて、とても楽しく仕事をしています。

仕事以外では、昨年、閉館した風間浦村の共同浴場「大湯・新湯」の記録を残したいと思い、実行委員会を立ち上げて、クラウドファンディングで資金を調達し、皆さんと記録誌を作成しました。本当にこの取組は、自分にとっては身に余るすごく大きな取組でした。今日、出席されている佐藤恭太さんも実行委員会の一人でしたが、一緒に取り組んでくれた皆さんや地域の皆さん、地域外から写真やコメントをいただいた皆さんなどたくさんの方々のおかげで作成することができました。

仕事を通じて、下北半島には伝統や食や体験など様々な魅力があることを日々実感しています。これらの魅力を磨き上げている方や、守っていくために尽力している方と会う機会も多く、その人たちこそ地域の魅力だと感じています。

ただ、分野を問わず後継者不足が課題というお話もよく聞きます。そういった魅力を地域の方々とともに伸ばしつつ、抱える課題を、見えてきたものを一つずつ解決していけるよう着実に取り組んでいきたいと思っています。後継者不足は、下北だけでなく、青森県全体に共通する課題で、取組が必要なのかなと思っていますが、下北の場合、感染症の影響と大雨災害で、更に進行していく可能性があると思います。

また、あるセミナーで、青森の共通する観光のコンセプトを考えるという時に、「とって食べる青森県」というのはどうかと話題に出たことがあります。私の出身地、田子町ではにんにくが有名ですが、どの市町村にも誇れる食というのはあるのかなと感じています。下北では、美しい景観と食の強みを生かす「ジオガストロノミーツーリズム」の一環で下北ジオダイニングという取組を行っているのですが、青森県全体で「とって食べる青森県」というコンセプトを推進していくような取組があればうれしいです。

今の仕事は３年目で、仕事も下北のことも、まだまだ分かっていないことがたくさんあると思うのですが、一生懸命取り組むことで、少しでも皆さんの力になれればと思って働いています。

（知事）

ありがとう。田子から、よくこちらに来てくれました。

田子では山でバーベキューをしたりしますが、下北もチャンチャン焼きや、いろいろなホルモンを食べたり、ダイナミックですから楽しんでください。東通牛ももっとＰＲしていきたいと思っています。

観光関連では、自分で言うのも何ですが、東日本大震災以降インバウンドを６倍に伸ばしてきましたが、このコロナでほとんどゼロになってしまいました。また戻していきたいと思っています。食べ物をうまく生かした観光は、まだ確立していませんが、下北には、風間浦のウニ、カニ、山のもの、ジビエなどいろんなものがあるので、連携していきたいと思っています。是非、その際にはよろしくお願いします。また、歌舞伎、能舞以外にも下北の風土に守られた伝統芸能とか、あるいは食べ物、景観、新しいところ、ここがすごいという魅力を、探してくれたらうれしいなと思います。

さて、今、我々が本音ベースで一番困っていることの一つに事業承継の問題があります。青森県の場合、親御さんが子供の進学の際に東京でもどこでも行けって出すでしょう。いずれ帰ってきて跡を継いでほしいと期待して出すようですが、向こうで活躍して帰ってこないことが多い

です。その影響もあって、今、後継者がいない県内中小企業が６割に上っており本当に困っています。

実は私自身９月に「この秋最大のコロナ危機」というテレビＣＭに出ていましたが、引き続き１０月も事業承継のＣＭに出ています。フォーラムや勉強会もどんどん開催して事業承継が重要だということを訴えています。そうしないと、後継ぎがいなくなって、せっかく、技術を持ったところも、人を雇っているところも、今の経営者がいなくなったら終わりで、従業員は失業し、技術も人も散らばってしまいます。だから、そうしたものを絶対残したいということで、この事業承継を進めることについていろいろ頑張っています。

（地域産業課）

後継者問題への対応ということで、県内の中小企業の事業承継支援の取組についてお話しします。県内の中小企業の経営者の平均年齢が毎年上がってきていまして、令和２年の時点で平均６１．８歳になっています。実際、事業を承継するには１０年ぐらいかかると言われていますので、そこから準備したら、７０歳を超えてしまいます。さらに、県内中小企業の約６割が後継者が決まっていないという状況でして、これは業種を問わず、県内どこの地域でも共通の課題となっています。先ほど、知事からも話がありましたけども、地域で技術のある企業とか、愛されている飲食店とか、雇用を支えている事業所がたくさんありますので、そういったところが無くなってしまうのを何とか防がなくてはいけないということで、県としては、中小企業が円滑に事業承継を進められるように、青森県事業承継・引継ぎ支援センターという専門機関と連携しながら、後継者がいない企業からの相談への対応とか、創業者も含めて引き継ぎたいという方を後継者人材バンクに登録したりとか、あとは、譲る側と受ける側のマッチングの支援をしたりとか、支援やフォローの体制整備をしながら、事業承継って重要なんだよということをいろんな方に理解してもらう普及啓発の取組を進めているところです。県としては、引き続きそういった取組を続けて、経営者の皆さんが会社の経営をスムーズにバトンタッチできるようにサポートしていきたいと考えています。

（知事）

というわけで、事業承継についてはかなり力を入れてやっています。というのは、まずは事業承継という言葉そのものや、そういう仕組みがあるということを知ってもらわなければなりません。そして、本県は、創業・起業件数がコロナ禍の昨年度でも１３４人で、毎年１００名を超えてすごく多いので、例えば、そういう人たちと、もう事業を継続できない人たちを引き合わせて、株主やオーナー、社長が別という形も含めて、いろんなパターンで承継できないか真剣に考えて取り組んでいます。青森を支えてきた企業とか技術や人財が失われることは絶対に防がなくてはならないという思いで、事業承継を促すためのＰＲなど一生懸命取り組んでいます。

（観光企画課）

「とって食べる青森県の推進」という御意見をいただきました。確かに青森県は食の宝庫で、食を切り口にした観光というのは、非常に魅力的な取組だと思っており、豊かな自然に囲まれた本県の農林水産物、そしてそれらの生業に携わる人たちを魅力的な観光資源と捉え、ストーリー性のある観光コンテンツの開発、旅行商品化について、県としても取り組んできています。

具体例を申し上げますと、下北地域におきましては、関連の町村や観光事業者と連携しながら、大間町では、大間マグロの食事がついたマグロ一本釣りの現場を見学する、題して「マグロ漁ウォッチング」、風間浦村の磯辺で放流されたウニをつかみ取りして、ウニ丼にして食べる「観光ウニ園」などの取組を県として支援させていただいております。また、他の県内の地域でいうと、青森市では、縄文にちなんだ「縄文栗拾い・栗焼体験」、りんごの品種「ふじ」が誕生した藤崎町のふじ原木公園では、りんごの収穫体験や現地の農家の方が作業の合間にホルモン焼きを楽しむという文化を体験する「りんご農家の暮らしぶり体験」、また、平川市では、駅から観光農園までのタクシー代とサクランボ狩りを定額料金で提供するという「フルーツタクシー」など、こういった商品造成などにも取り組ませていただいております。

しもきたＴＡＢＩあしすとさんでも、様々な旅行商品を企画していただいていると思いますけども、今後、「とってたべる下北」という企画を検討する際には、是非とも連携していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（知事）

そういうコンテンツをあちこちから集めて、大手旅行会社でも販売してもらうなどの取組をどんどんやっています。やはり、ワクチンが十分行き渡ってきた中で、経済を元に戻すためには観光の部分がすごく大事だと思っていて、下北にある食コンテンツを、アンコウの雪中切りなども含めて売り込んでいきたいと思います。冬の観光が下北の課題で、アイデアを一緒に出しながら進めてきましたが、アジアでは冬の青森が人気で、先々、台湾便、韓国便、中国便が戻ってきたときに、ただ雪を見るだけではなく、そういった食のコンテンツがあると大変楽しめますので、どんどん探しておいてください。田子とも連携してくれたらありがたいです。

（大下彩也香氏）

ありがとうございました。

事業承継については、私自身がそういう情報をちゃんと覚えておかないといけないと思ったので、情報の収集をして、お話が来た時には、紹介していきたいと思いました。

「とって食べる青森県」については、ＴＡＢＩあしすとの旅行商品の企画やイベントの企画が、他のところと比べてちょっと手薄なのかなと思うところがありまして、青森県と協力、連携させていただき、ノウハウを教えていただきながら掘り出して、商品を作っていきたいなと思いますので、よろしくお願いします。

（構造政策課）

私からは、グリーン・ツーリズムの関係を説明します。県では、平成６年頃からグリーン・ツーリズムを推進しており、これまで、他県との差別化を図るため、青森ならではの体験というものを開発してきました。

具体的には、猿賀神社でレンコンを収穫して味わうものや、深浦の雪下にんじんを収穫してジュースを作る、そういった、いわゆる「とって食べる」という体験メニューを開発してきた他に、観光産業と視点が同じくなるんですが、例えば、ここ下北では、大畑の魚市場、ここを見学して、大畑の暮らしぶりを体感してもらう、そういったストーリー性という付加価値を付けたメニューも開発してきております。こちらには、大下さんにも参加していただいたと思うんですが、今

現在、これらのメニューの販売強化に努めておりますので、是非、一緒になって情報発信していければと思っておりますので、よろしくお願いします。

（家洞昌太氏）

出身は、岐阜県です。中学生の頃から漁師になりたいという夢を持っていました。高校３年生の時、大学に行きたいという強い希望もなかったので、漁師になる方法はないかと調べていた時に、ホームページで佐井村の漁師縁組事業を見つけて、これはチャンスだなと思って、高校３年生の１１月に実際に佐井村に体験に来ました。そこで、村の人がすごく温かくて、実際に漁に連れていってもらって、いいところなので是非来ようと思って、翌年の３月から実際に移住して、今年で５年目になります。

現在は佐井村の牛滝地区というところで、定置網合同会社から指導を受けて定置網の対応をしています。主にサケが秋の漁ですけれども、ちょうど網の入替えの時期でもあるので、今は、サケ漁の定置網を入れるためのアンカーとかロープを張って、実際に網を設置する作業の最中です。１１月に入って網の設置が終わると、実際、網をおこしに行って魚を捕る作業に入りますが、それは大体午前中で終わります。今は夜が明ける６時過ぎぐらいから出て、長くて３時間、４時間、作業をして、昼前に港に戻ってきて、そこから魚の仕分けをするというのが主な作業になります。午後からは、年中、定置網を入れているということで、次の次の年の網を準備していかないといけないので、前シーズンに使っていた網を直す作業をしています。今年、小さい船を買ったので、夏は毎日、仕事が終わったら海に行って、釣りをしたりして、少しでも稼ぎになれと思って仕事をしていました。

これまで、５年間漁師の仕事をしてきて、最初はすごく厳しく怒られて、漁師の皆さんは、海の上だと、けがしちゃいけないと口調も荒くなりますが、陸に帰ってくれば、皆、優しいし、遠いところから来た自分を受け入れてくれて、とてもお世話になったので、これからも牛滝で漁師を続けていきたいと思います。

今はサケの時期ですけど、１２月から１月にかけて、タラの最盛期になり、その時が牛滝では一年で一番の稼ぎ時で、毎年、漁港もにぎやかになります。最初、タラを見た時に、網をおこしに行って、３キロか４キロぐらいのタラが何千匹も一気に網から浮いてくるのを見た時に、ものすごく感動して、毎年楽しみにしています。冬は寒いし、海も荒れるから厳しいですが、そういう楽しみがあるので頑張っていきたいと思います。

コロナの影響もあって、今はなかなか魚価が上がらない状況が続いていて、量は捕れますが、量に見合った金額にはなっていません。一人でやっていくのは厳しいということがこの５年間で分かりましたが、牛滝は自分たちと近い歳の人たちが結構戻って来ているので、パートナーとなる漁師を探して、そういう方と一緒に定置網に取り組んでいきたいなと思っています。今は小型定置ですが、もし将来的に可能なのであれば、若い人たちが集まって大型定置に取り組めば、やっぱり小型とは比べものにならないぐらいの魚の量が期待できるので、なかなか難しいとは

思いますが、これからはそういうことにも挑戦していければと思っています。

また、なかなか天然のものを捕るだけでは厳しいと思うので、育てることにも興味があり、将来的にはサーモン養殖に自分も参加してやっていきたいと思っており、養殖場ができた時には、たくさん養殖で頑張りたいなと思っています。

佐井村には、これからのタラもそうですし、ヒラメやサケなどすごくおいしい魚が多いです。魚種がとにかく豊富で、おいしい魚が一杯揚がっています。でも県内であまり認知されていなくて、ブランドといったら大間のマグロとか脇野沢のタラとかで、佐井村にはないので、一つでも主力の魚種を作ることができれば、自分たちの力になると思うので、是非、そういうのは頑張っていきたいと思います。

（知事）

何よりも、私たちの下北を選んで来てくれてうれしいです。

牛滝には、昔よく行っていました。今も良い漁場ですがかつてはもっと良くて、２千万漁師と言われる人たちがいて、今、その子供の世代が帰ってきてくれるという雰囲気で、大変ありがたいです。ただ、水産全体が非常に厳しい状況であるのも、セールスに歩いて肌で感じています。何よりも、需要をまず戻さなきゃならないだろうと思っています。また、漁師さんたちが怒るのは、危ない時に怒るのであって、別に憎くて怒っているのではなくて、せっかく来てくれた皆さんを守る気持ちで言っていると思います。終わればサッパリして、気性はいいから許してあげてください。

牛滝はものすごく静かで、夏は最高ですよね。冬もいいけど少し寒いね。海と一緒に暮らしていく強い気持ちを持った人たちが住んでいますが、家洞さんと縁があったんだと思います。

本県には、結構、岐阜、富山、福井などから移住者が来ています。そして、ここに住みついてくれて、先ほど話した能舞だとか歌舞伎だとか、いろんな文化も残っています。青森県は海で頑張ってきたという歴史があります。しかし、若い人たちがなかなか漁業に就かなくなった理由の一つとしても、魚価が安定しないという状況が影響していると思っていて、それで、Ａ！Ｐｒｅｍｉｕｍという、朝捕れた魚を青森市に持っていけば、翌日午前中に西日本に着く、香港や台湾にも翌日中に着くというシステムを作りました。香港に売り込んだり、コロナで休みになってしまいましたが、神戸のワールドワンという飲食グループに出したりしています。今は名古屋にもかなりの量を出して、販路の開拓に取り組んでいます。とにかく、我々としても流通の仕方を変えて、魚が生きている状態、あるいはものすごく新鮮な状態で次の日の午前中に着くようにすると、青森の魚ってこんなにおいしいですよということで、良い価格を出せるようになるので、販路開拓、流通革命を一生懸命取り組んでいます。

定置の話が出ましたが、定置の権利ってなかなか難しくてね。自分の地元の百石でもサケの定置をやっているから、興味を持ってくれてうれしいです。いろんな漁法があるけれども、網での漁はやっぱり頭脳戦だから面白い。それから技術力の戦いだから、潮目を見たりとか、専門家がいろいろやります。その話を聞いていて、昔のことを思い出しました。

また、いろいろと苦労をしながらも、自分でも仲間を見つけて大型定置をやってみたいとか思ってくれるのはうれしいです。

下北に漁港や船溜まりを整備してほしいと要望されますが、県としては、将来、つくり育てる方式で進めざるを得ないだろうと考えており、そのためには、漁港そのものを漁礁、生け簀にし

たいと準備してきました。今、佐井村で考えているのは、漁港にもう一つ防波堤を作って、波を穏やかにして、養殖ができるようにするものです。サケの養殖だけじゃなくて、コンブやアワビもできるようになります。そのことによって、ＵＩＪターンでもっと帰って来やすい、船酔いしない、漁港で魚をつくり育てて捕れるというところまでチャレンジしてみたいと思っています。何故、そういうことをやろうかと思ったのは、佐井の漁師さんたちがチャレンジしてくれるから。面白いからやろうって言ってくれないと、大きなものは作れない。なぜ、漁業集落ごとに漁港を作ったかというと、潮目とか釣りやすい時間はそれぞれの漁場で違うから、大きい漁港を作っても、船は時速１５キロで遅いから、漁場に着くまでものすごい時間がかかりますよね。だから、集落を残して、今度は漁礁、そこでつくり育てることに取り組みたいという気持ちがあります。

いろんなタイプの定置でもいいし、養殖でもいいし、いろんなことを、または、新しい仲間を呼んできたりして、自分たちでチャレンジしてくれて、地域をリードするような漁師さんになって欲しいなと思います。あと、私も売るのを頑張っています。苦労しながらも売り歩いています。

（下北地域県民局地域農林水産部）

今、知事から佐井漁港の取組の話があり、家洞さんからも養殖にチャレンジしてみたいという御要望がありましたが、佐井村や佐井村漁協からも要望をずっと受けておりまして、今年度から佐井漁港で、沖側に何ともう１本防波堤を作るという、大胆な取組を始めております。

佐井漁港ではサーモンのほか、幻のカレイと言われる高級魚マツカワも養殖する計画となっております。このマツカワについては、既に試験養殖を始めていて、令和５年度に漁協で漁業権、養殖を始めるという権利を取得するという方向で進んでいますので、これからは、若い人たちに、養殖の方に進出していただき、漁業の活性化に我々も頑張っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

（水産振興課）

家洞さんから、大型定置に挑戦してみたいという話を聞いて非常に喜ばしいと思っています。県でも、最近、漁師の人にスーパーの売り場に立ってもらって、実際、売ってもらうという「あおもりの肴フェア」という取組とか、御存知かもしれないんですけども、漁師の皆さんにモデルになってもらう漁師カードなど、新しいことを始めております。アイデアを当課にお伝えいただければ、地元に担当する普及員がいますので、一緒に考えていきます。よろしくお願いします。

（漁港漁場整備課）

新しいことにチャレンジということで、県として、漁業者を支える取組を、もう一つ、今年度から始めています。

漁港や漁場を使った漁業体験観光、これに漁業者自ら取り組んでいただいて、地域ににぎわいを作り、漁業者は副収入を得て、漁業経営を安定化していく。この取組は、佐井村漁協からも要望されておりまして、この１０月から佐井漁港をモデルに始めることにしておりますので、御協力のほどよろしくお願いします。

（総合販売戦略課）

知事から売るのは任せろというコメントがありましたが、まさに知事就任以来、高品質で安

全・安心な農林水産物を全国に強力に販売していくという、販売重視の攻めの農林水産業を展開してきているところです。先般、全国のダイエー１７５店舗で青森県フェアを開催してきたんですが、中心となる神戸店において、知事が先頭に立ってダイエーの社長ほかトップの方々、来られた消費者の方々にセールス活動を精力的に行ってきたところです。

今、コロナの中でなかなか対面活動が厳しいところもあるんですが、アバターという映像技術とかロボット技術を活用して、遠隔で接客したり、それから試食ができないので、小袋のお家に帰って食べるような試供品を作って配って、おいしいなって、後で買いに来てもらう、そういうような取組を工夫しながら精一杯やっているところです。家洞さんのような頼もしい漁業者の方々が取り組む中で、是非、一緒に、県としても販売に力を入れていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（知事）

本当にちゃんと取り組むからね。去年のコロナ禍でも、自分は４９回もセールスをしました。海外向けに、最近は、物は別に送って、モニター上でセールスしています。この間も台湾のテコやロイヤルグループにセールスしました。それから県では、農林水産部以外にも、県土整備部が大阪に営業の拠点を持っていて、どんどん青森の魚を売り込んでいます。

ただ、魚を捕ってくれる人がいて、魚を育てていく仕組みがあることが基本なので、県と一緒にチャレンジしてくれたらありがたいです。困ったことがあったらうちの普及員たちが何でも相談にのります。あと、加工などをしてみたい時には、下北ブランド研究所というところもあります。

（下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所）

むつ水産事務所にも５人の普及員がおりまして、佐井村の担当もおりますし、いろいろ御相談いただいて、連携しながらいろいろやっていければと思いますので、よろしくお願いします。

（知事）

でも、とにかく佐井漁港の沖にもう一つ防波堤を作るんです。真剣に考えてやっていて、国も十分に予算を付けてくれています。だって、そうやって、自分たちで漁場、生け簀を新しい形で作っていくなんて今までにないことだからです。

あとは君たちの頑張りに期待します。今日はありがとう。

（高屋龍一氏）

川内地区にあるむつ市海と森ふれあい体験館の館長を務めている高屋です。本業はむつ市で葬儀屋をしています。Ｕターンで２２歳で帰ってきました。高校卒業後、どうしてもお笑い芸人をしたくて東京に行ったんですけども、すごく才能のある方たちを見てすぐ諦めて、実家が葬儀

屋なものですから、葬儀の専門学校に行きました。Ｕターンするつもりは全然なかったんですけども、母親が病気したのをきっかけに２２歳で帰ってきました。その後、母親が亡くなって、事業承継せず、２４歳で独立して開業しました。お金も人脈もなかったものですから、地域の中での自分と会社のブランディングとして名前を売ろうというところもあって、一生懸命、地域活動に取り組みました。海と森ふれあい体験館に関しては、長らく務めた前任の館長が、家庭の事情で今年辞めることになり、その時に高屋はどうだということで、６月から急きょ館長をやらせていただいています。

前任の館長は、イルカや海の専門家で、研究の分野でも非常に活躍された方でした。私にはそういった素養はないのですが、地域活動に取り組んできたというのが強みだと思います。

やはり、海とかイルカの研究は、私には難しいので、地域の方たちを巻き込んで活用できる施設にしていこうと思っています。例えば、今まで６月から県内の大学生を呼んで、マリンアクティビティの開発をしたり、川内川でカヤックやサップをしてみたりとか、あとは、川内まりんビーチの利活用のワークショップや、清掃活動など、地域の方を巻き込んでいろいろな活動をしています。これからは、音楽と下北ワインの夕べとか、浜辺でサウナができないかとかそういった企画も考えていろいろ調べたりしています。

活動してみて思ったのは、やはり川内町というのは、一次産業は強いですが、その他の産業にあまり主だったものがなく、観光ルートについても、風間浦、大間に比べるとすごく弱いと思っています。地域の人にも少し諦めムードがありますが、こういうふうに関わっていくと、とてもチャレンジしたいという想いもあるし、ジオパークのジオサイトだったり、イルカだったり、自然、食のポテンシャルも高いと思っています。

そこで、これから取り組みたいことは、今、学生たちとアクティビティの開発をさせていただいていますが、そういったことも含めて、ワーケーションを促進していきたいと思っています。体験館の隣のひば造りの川内庁舎は、市町村合併でかなりの面積が空いていますし、その隣にまりんビーチがありますので、これらを一体的に活用したり、アクティビティだったり、体験型のものをとりそろえて、ワーケーションの促進をしていきたいと思っています。できれば、地元の人の日常みたいなこと、釣りだとか、山菜採りだとか、そういったところもワーケーションの素材として活用できないかなと思っています。ありがたいことにワーケーションの促進に関していろいろ事業に取り組んでみると、ありがたいことに県の職員の方も来てくれます。県民局の若手の方は何年かで替わり、どうしても個人的なつながりになるので、何か誘導的に関わりを持って活動できないかなと思ったりもしています。そういうことで、ワーケーションを県と一緒に取り組みたいと思っています。

（知事）

ありがとう。昔、毎年５月から６月にかけて川内の集まりによく呼ばれて、食べて飲んで歌っ

たりして、楽しみにしていました。川内は、いろんな人を受け入れて、皆で楽しめるところで、すごく好きです。

川内庁舎を使ってテレワークやワーケーションを進める場合、皆が集まって楽しそうにしている川内の雰囲気を是非生かしてほしいと思います。陸奥湾内だから海も穏やかで、魚も豊富で、ワーケーションにはぴったりの場所だと思っています。とにかく、住んでいる人が、今は高齢化したけど面白い。川内に行って集まると、何でこの人、こんなに面白いのだろうねって、皆で異様に盛り上がって楽しくて、その雰囲気が大好きです。

（高屋龍一氏）

楽しい方、多いですよ。一人ずつちょっとあだ名を付けて楽しもうかなと。

（知事）

ワーケーションは、５Ｇなどの環境整備よりも人間関係が大事だと思っています。住みながらいろんなことできるよう、期待しています。

（観光企画課）

ワーケーションのことについて、観光の点で申し上げます。働き方の変化に対応した新たな観光需要というふうに捉えまして、当課では、ワーケーションに関心のある県外の企業とそれから県内の宿泊事業者とのマッチングをするというような事業を今年度から始めて、これから取り組んでいくところです。マッチング商談会とか、宿泊施設の情報発信とかモニターツアーの実施等を企画していこうと考えているんですが、特にモニターツアーでは、宿泊施設におけるテレワークの試行に加えて、周辺地域での観光やアクティビティの体験、こういった組合せも非常に大事だと思っています。連携して取り組んでいけたら幸いだと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（地域活力振興課）

当課では移住に取り組んでおり、直接的にはワーケーションではないんですけども、リモートワーク移住の推進という観点で、モデルづくりをしてみませんかと市町村に働きかけています。昨年度から青森市では、浅虫地区と雲谷地区をワーケーションの地として活用していきたいと取り組んでいますし、今年度は、今日御参加の小寺さんも参画され、東通村でもワーケーションを含めて移住促進を考えてみたいと取り組んでいます。これにつきましては、年度末に他の市町村に情報提供したり、勉強会をやっていきたいと思いますので、そういった中でむつ市も含めて、情報提供しながら、要望があれば、我々としてサポートできるところはやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（知事）

絶対面白いと思います。この町はこの人が面白いとか出会いマップを作っても面白いと思います。川内はワーケーションにぴったりだと思っています。

（佐藤恭太氏）

ＣＯＤＷＯＲＸという屋号で今、むつ市に住んでフリーランスのＷＥＢデザイナーをしています。今から１１年前、震災の少し前に仙台からこちらに戻って来た形になりますが、数年前から県庁の移住交流担当の方々と付き合いがあり、動画に出たり、イベントに出たりしています。

（知事）

いろんなところに行っていただいてありがとうございます。

（佐藤恭太氏）

取材では大変お世話になりました。

Ｕターンしてから、私が地域で活動するようになった軸は、むつ青年会議所です。ここで、先ほどの高屋館長とも長く一緒に活動してきました。地域の中で活動するということに魅力を覚えて、それ以来、多くの活動をしてきました。さっき、大下さんが言っていた大湯・新湯の記録誌も一緒に作らせていただき、デザインは私が担当しました。発売中ですので、もしよろしければ災害復興支援として、入浴してお買い上げいただければと思います。

そういった多種多様な活動に顔を出していますが、来年度はむつ青年会議所の理事長になります。青年会議所では、今回の大雨災害の復旧作業に尽力していました。その中で、私が今、取り組みたいと思っていることは、もちろん復旧復興全般なんですけども、今回の大雨で流された下北の貴重な資産でもある針葉樹の活用です。悲惨な感じで流れ着いているものもありますし、多分、今、処分を検討されていると思いますが、是非、これをポジティブに利活用できるようにしたいなと思っています。バイオマス燃料や、チップ、紙とかではなくて、逆手にとって、これがふるさと納税とか、新しい名産品とか、何かしら有効活用して、災害に負けない強い下北というものをアピールしていきたいなと考えているところです。これから動き出した際には、是非、県庁の担当部局に御相談に伺いますので、よろしくお願いいたします。

（知事）

ありがとう。よくぞ言ってくれた。芸術的に根が張っている大きい木を磨いて玄関などに飾る文化がありますが、今回のは立派な根っこが付いた良い木がたくさんあったので、あれを磨けば、かなり高い値が付きそうだなと思いました。これをそのまま燃やしてもしようがないだろうと思いますし、砂などが入っていたりすると加工に向かないなど、いろいろ課題がありますが、せっかくの資源ですから、うまく剥げば使えそうだなと思います。

（防災危機管理課）

８月９日からの大雨で、下北では３日間で１か月の降雨量の２倍以上が降り、甚大な被害が発生しました。初動対応、そして応急復旧と、これまで対応してきまして、現在は国道２７９号も

一般車両が通行できる状態になっているという状況です。今後に関しましても、県庁、それから下北地域県民局はもちろんですけども、各自治体や関係機関、そして事業者等の力を結集して、早期に復旧・復興できるように取り組んで参ります。引き続きよろしくお願いいたします。

（下北地域県民局地域整備部）

今回の大雨では、山の奥の部分、山肌が大きく崩れて、それが小赤川の橋に詰まったりとか、海の方に流れていって、海岸に戻ってきてたまっているというような状況でした。小赤川の流木につきましては、ほぼ撤去し終わって、旧大畑高校に仮置きしている状況で、海岸の流木は随時撤去しているという状況です。現場に行くと、先ほど知事も話したとおり、良い木が一杯あるという声は、周りからも聞こえてきておりましたので、県では、森林の専門家の森林組合連合会ですとか、製材所の組合の木材協同組合に声をかけて、流木を見てもらいました。その結果、石がかんだりとか、深く砂が入っていたりとか、いろいろリスクはあるんですけども、使えるものもあるとの意見をいただきましたので、その方と共同しながら、利活用できるものは利活用していくということで考えています。あと、この話と並行しまして、むつ市・風間浦村の方で、ふるさと納税の返礼品に使いたいとか、そういった話も出てきておりますので、いろいろ耳を傾けながら、最大限利活用していきたいと思っています。

（知事）

東日本大震災の時も、いろいろな活用をした経験もありますので、本来、考え方はいろいろなんだけどね。石や砂が入っていますが、あれだけのヒバなので、何らかの形で使えるんじゃないかと思っています。

（防災危機管理課）

防災教育についてですが、当課では、防災教育に使えるツールを作っていますので、それを御紹介したいと思います。今、お手元にお配りしている「あおもりおまもりノート」は、防災について学ぶためのワークブックです。中身は防災に関する設問とか、読み物が書いておりまして、書き込み式で防災について勉強できます。この「おまもりノート」は、小学校低学年用、お配りした高学年用、中学生以上用という３種類となっており、それぞれについて指導者用の解説した指導者用ガイドブックも作っておりまして、それは青森県のホームページでダウンロードできますので、学校現場に限らず、防災教育を実施する際に便利なツールになっておりますので、是非、使っていただきたいなと思っております。よろしくお願いします。

（小寺将太氏）

出身は北海道の札幌市で、弘前大学進学時に初めて青森県に来ました。大学生の時に集落点検事業に携わらせていただき、大学院に進学と同時に、知事にも入っていただいていましたけど、弘前大学のＣＯＣ推進室、ＣＯＣ＋（プラス）推進機構の職員として、県内定着に携わる事業を様々やらせていただきました。補助金が切れた時に、誰がその後を担うのかという話になった時、せっかくだから今まで関わってきたものを継続させたいという思いから、平成３０年に東通村に移住して一般社団法人ｔｓｕｍｕｇｕを立ち上げました。

現在取り組んでいることとしては、むつ下北地域を対象にともに育つ共育型インターンシップと呼ばれる、１日、２日ではなくて、１か月、中長期のインターンシップのコーディネートと、青森県型地域共生社会の関連として、今年からは川内地区のコーディネートを始めています。

様々な活動を通していく中で、私自身が携わっていることの課題はやはり人口減少の中でどうやって若者を呼び込むかというところです。

そして活動に当たっては、二つの大事な視点を意識しています。一つは、やっぱり出て行く人をいかに止めるのかということと、もう一つは、どうやって外から呼び込むのかということだと思っています。

その中での課題もあります。むつ下北の共育型インターンシップで、今まで６０名が１か月住み込みで活動していて、今年の夏休みも１か月来ていただきました。ソフトの面では、むつ下北には仕掛けとして関わりしろが充実していると思っていますが、学生がたくさん来てくれて、嬉しい悲鳴がある一方、関わる場や泊る場所などのハード面の不足、そういうのが課題かなと思っております。

東通村で高校生を対象に地域人材育成事業に取り組ませていただいて、実際に空き家を改修したりしてきました。そして、大学生のみならず、高校生、中学生がいかに地域に関わるかという教育をしていく中で、やっぱり学校教育の活動時間の確保ということが課題として挙げられると認識しています。

今後取り組んでいきたいこととしては、今後もむつ下北地域を対象に共育型インターンシップをたくさん進めていくと同時に、学校教育内でも、高校単位で各校の魅力を生かして、学校教育内でも、実際に高校生への仕掛けづくりを図っていくような取組をしていきたいと思っております。

実際に県と一緒に取り組みたいこと、期待したいこととしては、さっきのハード面の話でいうと各市町村で、移住お試しハウスは整備していると思いますが、圏域単位でのお試しハウス的なコミュニティスペースがないと思っているので、圏域として、そういう学生を受け入れられるような居場所づくりがすごく大事だと思っています。もう一つは、県庁さんでも共育型インターンシップ、１か月、学生が活動できるような仕掛けというのがすごく大事かなと思っています。

あと、高校の場合には、やっぱり教育行政と経済を一体化させた取組がすごく大事かなと思っています。島根では高校に「高校魅力化コーディネーネーター」というスタッフを配置していますが、本県でも地域おこし協力隊と一緒に結び付けて、高校魅力化コーディネーター等の配置をして、例えば、半島留学みたいな形で、どんどん他地域の高校生が来られるような仕組み、そして取組に参加する高校生が活躍できる仕組みを是非、県でやっていただければすごくうれしいなと思っています。

（知事）

本当にありがとう。ＣＯＣは、文科省からもっと地元に人が残るようにしなさいと言われていました。特に弘前大学は残ろうと思っている学生がいても、全国的に人手不足だから県外に一本釣りで連れていかれたりしていることがあって苦戦しました。

でも、そういった中において、地域共生社会のことを理解して一緒に取り組んでくれているのは、本当にうれしく思っています。地域ではこの先、どうしても行政資源に頼れなくなるため、可能な限り、自分たちで一緒に支え合っていこうと、地域共生社会の取組を進めることにしました。漁村集落についても、地域経営体として残したいから漁港を整備しました。

地域共生社会には、移動、食事、医療とかいろいろな取組がありますが、若い人に残ってもらう、来てもらうというのがどこでも必ず課題になってきます。そこの部分を小寺君たちがアイデアを出して、いろいろ進めてくれているのが、とてもうれしいです。うまく連携することで、下北だけじゃなくて、青森県全体に波及することが期待できます。

実は青森県の集落群は強いんです。経済が回っているから、今、農業分野では年間３００名が新規就農しています。経済が回って暮らしやすくなると、若い人も来てくれる。このように、ものすごく手間と根気と時間をかけて取り組んできました。小寺君たちの力を借りて、次の若い世代を呼び込めば、東通村にある２９集落の全ては無理でも、主力集落が残ってくれれば、地域のゆりかごを守ることができるので、是非、一緒にまたいろいろな連携をしていきたいと思っています。

（地域活力振興課）

小寺さんには、普段からいろいろ大変お世話になっております。先般も、オンライン開催した青森県ＵＩターンフェアに御協力いただいたり、その他、先ほども申し上げましたけども、関係人口の構築、あるいは東通村でのリモートワーカーの移住促進のモデルづくりといったところも順調に進んで、これから学生の受入等を行うというようなことを聞いておりますので、我々としては、うまくいくように一緒にまた引き続きやっていければと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

（生涯学習課）

高校生の人材育成事業については、県教育委員会で、今年度から「地域の思いをつなぐ若者育成事業」を実施し、高校生等の若者が地域で活躍する地域活動者と共に活動し、主体的に地域の良さを発信することにより、若者の自己有用感・地域愛を育み、県内定着の促進を図る仕組みの構築に取り組んでいます。本事業では、ふるさとＰＲ動画の製作や高校生の目線で町の魅力を発見し、その魅力を発信する展示会の開催などが予定されております。小寺様のほか、本日出席されている高屋様に本事業に御協力いただいており、誠にありがとうございます。今後も引き続き、本県の高校生等の若者の育成のためによろしく御協力お願いします。

（下北地域県民局地域連携部）

県民局では関係人口の創出に向けて三つの取り組みを行っています。小寺さんから若者を受け入れているというお話がありましたが、この下北地域で、行政も含めた形で地域の課題解決のための取組を増やせないかなというのが一つ目。それから、このような取組は下北共通なので、

横展開していって皆さんで協力できることは協力して、情報共有していこうというのが二つ目。三つ目として、取り組む若い人がたくさん出てきているので、その人たちが仲良くまとまるようにネットワークを作るようなお手伝いをしたいなということで今年度から重点的に取り組んでいます。当然、そうなってくると、実績のある高屋さんとか、小寺さんとも御相談しながら進めていきたいと思っていますので、これからもどうぞよろしくお願いします。

インターンシップの居場所づくりについては、市町村と一緒に取り組むのであれば、元気な地域づくり支援事業費補助金という、市町村に対する県の支援などいろいろありますので、やりたいことがあれば、まず私たちの方を窓口にして、一緒に考えていきたいと思いますので遠慮なく御相談ください。よろしくお願いします。

（知事）

この地域はできるはずだ、この地域はまとまりが良くなってきているということで、県の方から無理難題をお願いしていると思いますが、それだけ県としては、やる気があるということです。

だって、漁港の外にもう一つ防波堤を作るぐらいですからね、最近すごいですよ、県としてもやる気満々です。

今日は、特に家洞君、よく来てくれたと思うんだけど。やっぱり地域で生活するのは面白いね。おかげで海のことも、また更に一生懸命取り組みたいという気持ちになりました。私たち青森県は、言葉では人口減少社会、高齢化社会と言っていますが、活力とか、ワイワイやる元気がなくなったら、暮らしていること自体がつまらなくなると思います。川内では年を取っても、皆が集まってにぎやかにしているし、活力は年齢と関係ないと思います。やっぱり自分のふるさと、あるいは移住して来た地域を好きになって、一緒にそこで暮らしていくために、お互いに何かに取り組んでいこうということが大事だと思っています。我々は、そういった皆さんのエネルギーをいただきながら、あるいは時にはこっちから無理難題をお願いしながら、それでもやっぱり青森を選んでくれてありがとう、この青森で一緒に生きてくれてありがとうっていう気持ちで地域づくりをしていきたいと思っています。

地域共生社会の取組はすごく時間かけて取り組んできたけれども、やっとここまできたという感じです。攻めの農林水産業で経済を回す部分、包括ケアで保健・医療・福祉を整える部分、若い人たちを呼び込む部分、皆でその地域で生きていくためには、いろんなジャンルのことをそれぞれよく見て、組み合わせていく必要がありますが、皆さんと一緒に取り組むことができてうれしく思っています。

今日、すごくいろいろな良い意見が出ましたが、勝手に予算化した時には許してください。アイデアを使わせてください。

それでは、長い時間、本当にありがとうございました。また一緒に頑張っていきましょう。